

幼童話 不思議な金の鈴

— 本會懸賞募集入選作 —

信 子

保彦さんは今年七つ、毎日お幼稚園へ行つて元氣にお友達と仲よくお遊びするよい子でした。或日曜の朝保彦さんはおうちの裏の畝できれいなお花に水をやつてゐました。するさずぐそばで何だかガサ／＼ガサ／＼音がしますから、何かゐるのかとさうさ草の下をのぞきました。するさずぐでせう、一匹の鈴蟲が蛙に脚をくはへられて逃げやうさばたく／＼やつてゐるではありませんか、保彦さんは心の優しいお子ですから早速蛙を捕へて鈴蟲を逃がしてやりました。さうして蛙には「鈴蟲さんなんかくはへてはいけないよ」といつてはなしてやりました、ほんたうに保彦さんは優しいお子ですね。

丁度その夜でした保彦さんはあた／＼かいおふしんの中ですよ／＼ねんねしてゐました、する

「夜中に誰か『坊ちやんく』と呼びました。保彦さんはふと目をあいて見ますと今日の鈴蟲さんが枕もみにすはつておじぎをしてゐました、「あゝ鈴蟲さん何しに來たの」を聞きますと「今日はあやうい所をお助け下さいましてありがたう御座いました、お禮の印にこの金の鈴を差上げますから坊ちやんが何か大層お困りになつた時にこの鈴を三度振つて下さい」をいつてきこかへ行つてしまひました、保彦さんは、ありがたうをいつてそれをお洋服のポケットの中へ入れておきました。

その次の日曜に保彦さんは仲よしのボチとお山へ遊びに行きました。お山には椎や栗の實が澤山落ちてゐましたから大喜びで拾つてゐましたが袋に一ぱいになりましたのでポケットからお菓子を出して食べやうとしてボチを見ましたがゐません、「ボチよく」を呼びましたが來ませんから自分一人岩に腰かけてお菓子を食べながらボチの歸るのを待ちました。暫く待つてゐましたがボチは來ません、ボチよく「大きい聲で呼びましたがボチのかけて來る様子もありません、ボチはどうしたのでせう? (暫ク間ヲオク) さてボチは保彦さんが栗の實を拾つてゐる

る時お鼻をくくんしながら何かさがしつゝお山の奥の方へ行くミ大熊に出會つたので
す。強いボチはすぐ飛びかゝつて熊をかみ合をしましたが、熊は中々強くボチの首輪をくはへ
て振り廻しました。首輪はぼつとりきれました。熊はさうく、ボチの首筋をくはへてお山の
奥へさうく行きました。さうして大きな岩屋へはいつて行きました。そこにはライオン大王様
がゐるのです。熊はボチを大王の前へつれて来て「今日はこんなよいものをもらへて来ました」
さいつておじぎをしました。大王は「やあこれはめづらしいものを挿つて来た晩の御馳走に
しやう」さいつて小屋の中へ入れてしまひました。熊は御ほうびを貰つて自分の穴へ歸りまし
た。

こんな事を知らない保彦さんはいくら待つてもボチが来ないからボチよくミ大聲で呼びな
がらだんく山の奥の方へ行きました。するさ犬の首輪が落ちてゐます。「おやつ」ミ拾つて見
ますミボチの首輪です「やつ之れは大變だボチは何かにやられたかも知れない困つたなあ」考
へてゐましたがふみボネットの金の鈴の事を思ひ出し「さうく困つた時にこの鈴を振るさよ

いのだ」喜んでリン／＼リンリン／＼三度振りましたら金色の鳩がバタ／＼／＼ここから飛んで来て「坊ちゃん何御用ですか」いひました。保彦さんは「あゝ鳩さんよく来てくれましたボチがなくなつたからさがして下さい」いひました。鳩さんは「はい、暫くお待ち下さい」バタ／＼／＼／＼飛んで行きましたが間もなく歸つて来て「ボチはライオン大王の所にさらへられてゐます」いひました。

保彦さんは「ありがたうそれでは僕を案内して下さい」いひつて鳩さんを案内にして山の奥へ奥へはいつて行きました。するゝ突然岩かげから「ウォーツ」いふ聲、見るゝ大きな熊がさびか／＼う／＼してゐます。保彦さんにはつこり／＼して金の鈴をリン／＼リン／＼／＼／＼振りました。するゝ不思議にも今迄がんばつてゐた熊が急に後をむいてこそ／＼逃げて行つてしまひました。保彦さんは之れは愉快々々々元氣よく又出かけました。暫く行くゝ竹やぶの中でがサ／＼／＼／＼音がします「やつ又何かるるかな」思つて見るゝ驚いた、大きな虎が目をかかせて「ウォーツ」、「やつ之れは大變だ」早速金の鈴をふりましたするゝ不思議にも今迄おこ

つてゐた虎公はこつくりこつ眠つてしまひました。

保彦さんは「これは面白い〜」と大喜びでだん〜先へやつて行きました。暫く行く道のまん中に大きい岩があります。じやまな岩だなあと思ひながら岩の上へ登りました。するこそ岩がむく〜〜と起き上りました保彦さんはびつくりしました。よく見るこそそれは岩でなくて大きな象のせなかでした。象はおこつて鼻で保彦さんをまきつけ高く差し上げて今にも投げやうにしました。投げられたら大變です。保彦さんは例の金の鈴をリン〜リン〜リンリン、する〜さうでせう、象は保彦さんをさう〜下へおろし膝をまげ頭をさげてしまひました。そこで保彦さんは象の背に乗つて金の鳩の案内で岩又岩の山路をぎん〜行きました。そうしてさう〜大きな岩屋につきました。所が岩屋の入口は鐵の扉がびつたりこしめてあつてはいゝ事が出来ません。保彦さんは象にこの扉を破れ〜いひつけました。大力の象は扉に鼻をかけるや、めり〜〜と破つてしまひました。此時心地よくるねむりをしてゐたライオン大王はこの音に目をさましたさうしてこちらを見ました。保彦さんが象に乗つてはいつて來るの

を見つけてライオン大王は「ウォーツ」をほえました。その聲のおそろしいといつたら岩屋も山も一度にくづれてしまふかと思はれる位でした。そうしてその眼はいかりに燃えて、らん／＼こか／＼やき、お口は火の様に真紅で身の毛もよだつ様なおそろしい姿でした。

けれども保彦さんは平氣でにこ／＼しながらポケットの金の鈴を出してふりました。する／＼今迄勢きつてゐた大王様は見る間にうれしそうな優しいお顔になつて「タン／＼タラララ、タン／＼タラララタータ／＼タタター」をおさり出しました。そのおさが如何にも面白いので保彦さんは手をうつて喜びました。する／＼奥の小屋からボチのなき聲が聞えて來ました。保彦さんはこんで行つて小屋を開けてやりました。ボチは喜んでさびつきました。

保彦さんはボチを抱いて象の背にのつて山を下りました。ライオン大王はそんな事をちつとも知らないでいつまでも「タン／＼タラララ」をおさつてゐました。